

社会的平等と民主主義*

* 原題 : Social Equality and Democracy

ジヴィット・アブラムソン (イスラエル)
大竹優子 (大阪) 訳

[背景 : 2011 年夏、スイスのヒツキルヒでの ICASSI。会場の講堂で、講演が始まろうとしている。司会のジョン・ニューバウアー (John Newbauer) 氏が、本日の講演者、ジヴィット・アブラムソン (Zivit Abramson) 先生を紹介した。ジヴィット立ち上がる。]

ジヴィット[以下 Z] : ねえ、始める前に、窓を閉めた方がよくない? その方がいいと思うんだけど。

ジョン[以下 J] : そうかい? そのままでもいいんじゃないかな?

〈スライド〉 葛藤だ!

Z : ちょっと寒いんじゃないかしら。体によくないわ。

J : 新鮮な空気を入れるのはすごく体にいいじゃない?

Z : あの、ひょっとしてあなたは間違ってるんじゃないかしら。

〈スライド〉 正しいのは誰?

J : ぼくは正しいよ。

Z : どちらが正しいかなんて誰にわかるの? あのね、窓を閉めなかったら、私は講演の間中寒さが苦になってしまうと思うのだけれど。

〈スライド〉 よけいに苦しむのは誰?

J : 窓を閉めたら、息苦しくなってしまう人もいるかもしれないじゃないか。

Z : 力 (power) を使ったら、私の言うとおりにする?

〈スライド〉 力で決めるの?

J : ぼくの方が力が強いことははっきりしてるからね。どっちが強いかで決めるんだったら、窓はそのままでいいことになるね。

Z : 私の方が年上よ。それって、私の方にたくさん権利があることにならない?

〈スライド〉 年の上下で権利がちがう?

J：おやおや。若い方にこそたくさん力があるんだよ。「世界は若者が動かしている。世界は彼らのものだ」って、聞いたことない？

これって無駄なことしてますよね。どれもよい決断のための基準とは思えません。いま大切なのは、仲間でありたいということ。それなら私がジャケットを着たらどうかしら。そうすれば窓を開けっ放しにしておいても寒くないでしょう。

J：その案はいいね。

[ジヴィット、上着を着る。]

ジョン、ありがとう。みなさん、お待たせしてごめんなさい。私たちにはよい判断基準がわからなかったのです。それにしても、私たちが見つけれなかったのは、判断基準なのでしょうかね？ 私の言うこととジョンの言うことの、どちらの方に重きを置くかを決定してくれるものが見つからなかった、ということなのでしょうかね？ ここで問題となるのは、我々が合意に至ることより他に大切なことはないのだということです。今回の講演にあたって、私は孫息子に相談しました。すると彼は、賢い方の意見に従って決定するべきだ、と考えていました。

〈スライド〉 賢いのはどっち？

孫に、どちらが賢いかを誰が決めるのか、聞いてみたらよかったですね。あるいはまたジョンは、ここでは自分の方に決定権があるんだ、だって自分は男性だから、より優位なもの、なんて言い出していたかもしれません。

〈スライド〉 男性だから？

しかしそうしたら、私はかよわい女性として、私のしてほしいようにしてくれなかったらひどく傷けられる、とはっきり申し上げることになったかもしれません。

そうだ！ ひょっとして、物事を決めるときに一番よくある考えかたは

〈スライド〉 どっちが金持ちか

じゃないでしょうか？？？ お金がたくさんある人の言うとおりにできる、というようなことです。

こんな風にして決めたときはいつでも、私たちのうちどちらかが勝者となり、もう一方は負けた感じがすることでしょう。勝者の方は好きなように決め、もう一方はそれを受け入れなければならなくなるのです。片方の方がもう片方よりも重要人物となってしまいます。これだけの理由で、一方の方がもう一人よりも価値があることになってしまいます。もう一人のほうは尊敬されなくなってしまい、取るに足りないと思なされます。そんな人の望みは不適切だとされてしまいます。[しかし] みなさんはこれまでに、自分のことを軽んじてほしいと思っている人に出会ったことがありますか？ 自分のことを聞いてほしくない人には？ 自分を取るに足りないと思っしてほしい人には？ 言い換えると、自分のことを尊敬してほしいと思わない人に、みなさんは出会ったことがあるのでしょうか？

問題や葛藤を解決する方法はただ一つしかない、と、アドラーやドライカースは教えてくれました。それは、社会的平等（Social Equality）を土台として相互尊敬と協力を実践することです。ドライカースは相互尊敬を、彼の提唱した「葛藤解決の4段階」の、最初のステップに位置づけています。さて、彼はどのようにこれを最初のステップとしたのでしょうか？ それは、ドライカースが次のことを知っていたからです。それは、葛藤の中にあるふたりは平等なのであって、ふたりの間のどんな違いも一方を他方よりも正しいと判断する決め手にはならないのだ、という考えを受け入れた人にしか葛藤を解決することができない、ということです。

すべての人が決定に参加する権利を持つという、重苦しく感じるかもしれません。[しかし]私達はみんな平等だという考えを受け入れると、人々と調和して暮らすことができるようになりますし、競争に勝ったり自分の優位を証明することに無駄なエネルギーを使わなくてもすむようになります。

ひとたび相互尊敬を伴った平等を確立すると、葛藤の背後にある本当の問題を見つけることができますから、一方が降参したり争いになつたりせずに合意に至ることができるようになります。これが、ドライカースが指摘した次なるポイントです。本当の問題を見つけて合意に至ること。すると勝つ人も負ける人もいなくなります。例えば今さっきのジョンとのやりとりでも、どちらが優位かを争っていた間はふたりは決して合意に至れませんでした。問題解決のためには、それまでの論点だった、どちらが上かを決めることをあきらめる必要がありました。そうなると残るは、窓が開いていると風邪をひくんじゃないかと私は心配なのだ、ということだけです。この問題を解決するために、私はジャケットを着ることにしました！ いつも、葛藤に勝つことが論点でなくなったときに、問題が解決できるようになります。葛藤は終わり、解決策を見つけるために協力しようという意志が起きてきます。けんかに勝つことではなく、問題を解くことが目標となるのです。

このことに関して、私が気に入っている例が二つあります。一つめは、ふたりの幼稚園児が遊んでいるのを私が見ていたときのことでした。彼らは、何だったかは覚えていないのですが、何か青いものと緑色のもので遊んでいました。ふたりはどちらも青い方で遊びたがりました。

「青いのがぼくのだ。」

とひとりが言いました。

「ダメだよ！ 青は君のじゃない。ぼくのだ。」

もうひとりが言いました。彼らは言い合いを始め、それはだんだんエスカレートしてけんかになってしまいました。親たちは介入しませんでした。そのうち、片方の子が考え込んでいるのがわかりました。彼は本当は一緒に遊び続けたかったのであって、けんかしたくはなかったのでしょう。彼は言いました。

「ぼく緑のにして、青だと思ふことにするよ。」

そして彼らは遊び続けました。

これは人々や国にも、同じように適用できます。このことを理解している政治家がいました。最近、エルサレムで集会があったのですが、イギリスの前首相トニー・ブレアの話です。彼がどれだけドライカースに賛成しているか、ちょっと見てください。

結局のところ安定は、ただ、今ある諸問題に対する賢明な解決策によってのみもたらされるものではありません。それは、自らの心の内に、他者も平等であること、他者を尊敬することの重要

さを知っている人たちからもたらされるのです。なぜなら、自由とは単に自分だけの自由ではないのですから。それは、あなた方も認める権利なのですから。

もう一つの私のお気に入りの例は、相互尊敬と協力のもとでは政治的葛藤も解決できるということです。イスラエルとヨルダンが平和的合意の調整を行っていたときに、両国の間にはある事情がありました。双方とも平和を強く望んでいましたが、最終段階になって、紛争になる恐れが出てきたのです。イスラエル南部のうちかなりの部分は、もともとヨルダンの国に属していました。この領域を長い間イスラエルが占領していたのですが、そのうちにイスラエルの集落が移住してしまっていたのです。私は、「神様、彼らは全てなかったことにしてくれないでしょうか？」と考えていたことを覚えています。明らかにヨルダン人には領土の一部を手放す意志はありませんでしたし、移住者のほうにもその土地を離れる意志はありませんでした。どうしたらいいのでしょうか??? しかし! 双方の本当の目的は、平和的合意に至ることでした。そして、ヨルダンの領土であるその問題の土地は、向こう 100 年の間イスラエルに貸し出されることになったのです。私たちは、ヨルダンとの間の平和を祝福しました。

これは一つめの例といくらか似ていると思いました。土地はイスラエルの手に残り、ヨルダンはその土地が自分の領地だというつもりでいる、というのですから。

さて今度は、私たちはみんな平等でそれぞれに居場所があり、存在し成長し調和して幸せに生きるために協力しなければならない、という、アドラーの信念の基礎についてみていきましょう。ドライカースは、これが人類の一番根深いところにある欲望であり、いつの時も人間はそのために働き、戦い、生き、そして死ぬのだ、と述べます (Marriage - the challenge, p191-2: 邦題『人はどのように愛するのか』)。すべてはここから始まります。引用すると、

人類の歴史が始まって以来、孤立していた人など一人もいない。

と、アドラーは 1933 年に述べています (Adler, 1979)。ヒトは、一人で生きるにはあまりにも弱い生き物です。自然界では弱い生き物は孤立して生きられない、と指摘したのはダーウィンでした。そのような場合に、人類のように、集団生活を営むという進化が起こりました。これが人間の赤ちゃんや子ども、そして大人にとっての、生き残るための唯一の方法なのです。

ところが、私たちは生き残る事だけを望むではありません。他のあらゆる生き物と同じように、私たちも生命力を授かりました。その目標は生活をよりよくすること、発展させること、私たちの住むこの地球での暮らしに、もっともっとよく適応することです。そして生活をよりよくし、発展した文明へと到達するためには、協力と分業が必要となりました。分業とはつまり、私たちみんなに居場所があるということを意味します。一人一人の貢献が必要とされるのです。他の人の貢献なしには誰も生き残ることができませんし、そしてそんな風に人は所属し、必要とされているのです。

一人一人が必要とされているのですって? もしそうだとしたら、すべての人には居場所があるということが証明できることになります。みなさんの力をお借りして、私がやってみましょう。

ちょっと想像して、教えていただけますか? いったい何人の人が、私たちが今ここに座ったり講演をするのに貢献してくれたでしょう?

この建物の壁を建てた人。壁に必要な材料を運転して運んだ人。その運んだトラックを作った人。トラックの金属部品を集める係の人もいたでしょう。トラックといえば、タイヤを発明した

人についてはどうでしょう？ 彼らがいなかったら私たちはここにいたことができたでしょうか？ それから、これらの人たちみんなの食べ物や服や靴などを用意した人たちもいます。旅行会社の人にもいましたね。事務所を建てた人とか、通信手段を発明したり作っている人たちなども…。

あなた方をここへ来る気にさせた人もいるはずですし、アドラーが自分の説を創り出すのを触発した人もいるはずです。それから、言葉！ 私がこうして話している言葉。私がこの原稿をプリントできるようにしてくれた人たちもいます。

この考え方はわかりやすいと思います。私たちはお互いに頼り合っており、私たちが知ると知らざるとにかかわらず、すべての人間は有史以来ずっと関係し合っているのです。こうしてすべての人が貢献し、そして居場所を持っていることになるわけです。

ここで、いつも少し曖昧になってしまう事柄についてお話したいと思います。みなさんの中には、病気の人や助けが必要な人々、障害のある人たちについてはどうなの？ とお考えになる方がおられるかもしれません。私の見方はこうです。誰も、貢献したり居場所を確保するために偉大なことをする必要はないのだ、ということです。このことを説明するために、私は自分のとてもプライベートな話をしようと思います。というのは、これは私たちのうちの多くが遅かれ早かれ突き当たる、重要な問題だと思うからです。

私のパートナーは、数年間完全な介護が必要な状態でした。何もできず、何をするにも助けが必要でした。彼のことを役立たずだったと思う人もいるでしょう。居場所もなく何の貢献もしていなかったと思う人もいるかもしれません。彼には世話をしてくれるヘルパーがいました。フィリピンから来た男性でした。その男性はいつもガールフレンドを連れてきていました。（彼女は、それほど重い介護を必要としないご婦人のところで働いていて、わりと頻繁に職場を離れることができたのです。）

私のパートナーが亡くなったときこのカップルは私に、彼らの家の写真を見せてくれました。その家は、彼らがイスラエルで助けを必要としている人達のところで働いている間に、フィリピンで建てられていたのです。彼らは稼いだお金をフィリピンへ送り、二人の将来の暮らしのために準備をしていたのです。私のパートナーの名前はマターニャといいます。家の写真を私に見せてくれながら、彼らは言いました。「これはみんなマターニャのおかげです。彼と過ごしたこの数年は最高でした」。私は、彼はあの状態にあってさえ役に立っていたんだわ、彼もまた、その彼のままで必要とされていたのね、と思いました。考えてみると、マターニャはそのカップルにだけでなく、家を建てるために彼らが雇ったすべての人のためにも役に立っていた、ということになります。

別の例としてみなさんに、偉大な映画監督フェデリコ・フェリーニの映画、『道』("La Strada")から、ちょっとしたシーンをお見せしたいと思います。これは、ある若い女性のお話です。彼女は少し発育の遅れがあって、家族から、イタリア中をまわる旅芸人のザンパーノという野獣のような男の所にやられたか売られたかしました。彼女はとても苦しい生活をしており、あらゆる方法でこの野獣に仕えるように強いられ、生きる事にたいした意味を感じられていませんでした。ある日、あるサーカスで彼女は一人の素敵な若者に会います。この若者が彼女を勇気づけるのです。彼は、彼女にも居場所があって人々の間に所属しているのだと、それはザンパーノが彼女を必要としているからだ、と説明します。ザンパーノには誰か世話をしてくれる人が必要なのだ、あなた以外の誰がそれをするのか、と彼は言うのです。

『道』の動画が流れる]

私の先生で友人でもあったアヒ・ヨタム (Achi Yotam) は講演の中で、なぜ私たち一人ひとりが尊敬に値するのかを話していました。アヒは、それは私たちがみなクリエイターだからなのだ、と考えました。アドラーは言いました。私たち一人ひとりが自分のライフスタイルを創造するのだ、と。子どもの生まれには、身体条件や社会条件など、いくつかの与えられた現実はあるでしょう。器官劣等性のある身体、生まれた時代や場所、家族布置、両親のライフスタイルなどなど。しかしこれらのうちどれ一つとして、その子がどんな人になるかを**決定する**ものはないのです。子ども自身が、彼のクリエイティブな力でもって決定するのです。そしてこういった意味で、彼はクリエイターなのです。それは芸術家と同じこと、作曲家がメロディーを作るのと同じことなのです。それだからすべての人は一人一人がみな尊敬に値するのだ、とアヒは言っていました。

それでは決断と平等の問題にもどって、これを二つの状況から見てみましょう。

一つめは育児です。育児についてアドラーやドライカースが教えたことはすべて民主主義の、社会的平等の原則に基づいていて、それゆえ大人であれ子どもであれすべての人を尊敬するものです。

例として、自然の結末と論理的結末を教育の方法として用いるという、ドライカースの考え方をあげてみましょう。罰の代わりにこれらの結末を使うことには、次のような意味があります。それは、大人の方が優位だからとか物事を大人の好きなようにさせたいからという理由によってではなしに、自分の義務を果たしたりある種の行為をやめることが子どもに期待されている、ということです。親たちがときどき言うように、「だって私がそうするように言ったから」ではないのです。ちょうど政治的民主主義のように、権力のある人がそうしたいからという理由で法が強制力を持つわけではないのと一緒です。人が道路の片側を運転しなければならないのは、みんなが無事であるためにであって、決して支配者の気まぐれから決まったわけではないのです。

同様に子どもは、彼らの所属する社会集団での必要性からいろんな行為を行うように期待されます。子どもが間違っただけの行いをするのであれば、彼の行いは変わらなければなりません。それは、彼自身を傷つけるからだったり、彼と他の人との関わり合いのためだったり、また他の人を傷つけたり迷惑をかけたからという理由からです。

そのようなときに親が自然の結末であれ論理的結末であれ、結末に任せるなら、子どもは必要に応じた自然あるいは論理的な道理を学びます。子どもは平等な人間として尊敬され、軽んじられることはありません。彼は失敗から学ぶことができます。例えば権威的な態度から子どもは、権力があって決断をくだす人もいるし権力がなくて従わなければならない人もいる、と信じ込んでしまうかもしれません。するとその子は権力のある人の一人になろうと決心するかもしれませんし、今まさに私たちがお話ししている「社会生活の鉄則」を、理解せずに育ってしまうかもしれません。またその子は、彼自身や周りにいる人達の人生を困難にしてしまうような、間違っただけの仮説を身につけて育ってしまうかもしれないのです。

次に、カップルでの場合を見てみましょう。

私たちが「結婚契約 (the marriage contract)」と呼んでいるものが平等に基づいたものでない場合、あらゆるときにそれが危機の火種となります。例えば、「賢い男」と「かわいい女」という(彼らも気づいていない) 契約のあるカップルがあります。しばらくするとそうしたカップルはたいがい、自分たちが大きなトラブルの渦中にいることに気づきます。何年かすると、彼女の方

は勉強することに決めるかもしれません。彼女はかわいい女から次第に自分の意見を持った女性へと変わりはじめ、自分は結局のところそんなに愚かでもなかったのだと気づき、そして突然、自分も尊敬されたいと思うようになります。それまでは、尊敬はすべて彼の、彼だけのものでした。彼女は甘やかされるがままでいました。彼女は欲しい物を何でも買えて、夫はそれを自慢に思っていたのです。これはヘンリック・イブセンの戯曲になぞらえて「人形の家結婚」と呼ばれる、有名なカップル構造です。

それから、こんなカップルもあります。妻があらゆることを引き受けることに高いプライドを持つ、いわゆる「スーパーウーマン」で、すべての賞賛を得る一方、夫の方はチャーミングさで愛情を得ているといったカップルです。このスーパーウーマンは最後には疲れて、愛情や支えが欲しくなるのです。ナイスガイだって、みんなと同じように賞賛は欲しいものです。この人達の仕事と愛の分業は平等ではありませんから、契約を書き換える勇気を持たない限り、彼らは二人とも極度の欲求不満に陥ってしまうでしょう。私は、カップルたちが家の雑用や能力のすべてを均等割りするのがよいといっているのではありません。彼らが階級のような上下関係ではなくて、双方が自分自身やお互いを認め合うようになるべきだ、といっているのです。

それでは、公の場ではどうでしょうか？ もう一度、エルサレム会議でのトニー・ブレアの言葉に戻りましょう。

民主主義への動きは、消え去ることはないでしょう。自由は単なる歴史上の通過点ではありません。人間の存在にかかわる衝動なのです。それは一つの時代にのみ擁護された条件なのではなく、人間の精神を定義する条件なのです。この自由とは単に投票の自由のことではありません。自由とは、組織の変革にのみとどまることなく、「私は私のままで、あなたを違うままに尊敬し、そして我々は共に、より良い別の世界を作り出すことができる」という心の姿勢にかかわることなのであって、このことを知っている人の上にこそ未来があるのです。これは創造性、革新そして人間の精神の探求における本質的な信念なのです。

社会的平等はただ考え方としてあるだけではなく、これを把握し理解することがすべての人々にとって役に立ちます。社会生活の動力学を理解し、自分は劣っても優れてもいなくて所属しているのだと知ることは、共同体感覚を成長させる土台となります。アドラーは、共同体感覚があることと精神的に健康であることを同じに見なしていました。そのように社会的平等の事実を受け入れることと幸・不幸は強く関係しているのです。

もしこのアイデアと社会的平等の理想を受け入れることが理にかなっているのなら、そしてもしこれが平和で調和のある社会生活を約束してくれるなら、どうして人々はいつでもどこでも階級を作り続けるのでしょうか？

私はとても興味深い問題が提起されているのを見つけました。フランス革命と民主主義の父祖のひとりとして知られている 18 世紀の哲学者、ジャン・ジャック・ルソーの書いたものです。彼の率直な言葉と私が見つけた彼の問題提起は、人と人の違いは社会的な意味での価値の大小をあらわすものではないのだということを示しながら、質問と回答の両方を与えてくれます。ルソーはこの記事を、ディジョン・アカデミーが彼にした質問への回答として書いています。質問は：

人間の間にある不平等の起源はなんですか？ そしてそのような不平等は自然法によって

認められているのでしょうか？

ルソーはこのように回答を始めています。

私は人間の間には2種類の不平等があると考えました。一つは私が自然のまたは物理的な不平等とよぶもので、それらは自然が創り出した年齢や健康、体の強さそして心や魂の質などにあらわれるものです。

もう一つの不平等は道徳または政治に関するものといえるでしょう。それらは、慣習の類によるものであり、社会通念によって創り出されたか少なくとも権威づけられたものです。

この種の不平等は、ある人々が他人に迷惑をかけながら享受している様々な特権に存在します。例えば裕福さ、名誉や権力など、そして他人の服従を要求することもこれにあたります。

自然の不平等の原因についてたずねることはばかげています。自然の不平等の定義がそのままその答えになっているのですから。

この二つの不平等の間に重要な関係があるかどうかについてたずねることはもっとばかげています。というのは、言い換えると次のように質問することができると思われるからです。

「命令する人は従う人よりもいつでも必ず善い人でしょうか？ 体や心の強さ、賢さや徳といったものは、いつでも力や富と同じ比率で個人のなかに見られるものでしょうか？」

この問題提起は、さっきのジョンと私の言い合いを思い出させませんか？ 自分が正しいとか自分の方が賢いと信じているからといって、また高い教育を受けているとか裕福だからといって、その人の方が価値が高いとかより多くの権利を持っているなんて、どうしていえるのでしょうか？

アドラーは晩年、このように考えていました。

自分が居場所を見つけるために戦わなければならないと信じている人々が、何らかの種類の優越性をめぐって競争する理由は、彼らが人間の間でどのようなものごとが運ぶかを理解していないということなのです。人々は誤解に基づいて成功や完成や克服に向かって、他者との競争に勝つという意味で目標追求をします。彼らは、実際にはそのエネルギーは、自分自身にとってだけでなく、他の人々にとっても意味のあるような貢献をなすことにつきこまれなければならないということを理解すべきです。これを理解していない人は、自分はずで居場所をもっているし、私的な「自然の」違いとは関わりなく所属しているのだということを学ぶべきです。他者より優れていようとするのを断念すれば、もっと心地よく感じられるでしょう。ひとたびこのことを理解するや、仮想的な競争に勝つことによって成功しようとする望みは、貢献をなすことによって成功しようとする望みに変わります。彼らは精神的な健康を得、自分が属しているグループとの間に、より大きな調和を体験します。

実際に私たちが知っているように、彼らが所属している集団とは人類なのです。

嬉しいことにこれらすべては理解や信念、仮説、目標についての話ですから、私たちは構えを自由に変えることができます。他人よりも優れているとか劣っているとか感じる必要はありません。私たちは所属のために選択することができるのです。

みなさんに2枚のスライド(図1、図2)をお見せします。これらは社会生活において私たちが選択できる2つの道を示しています。一つは、はしごを登って他人を頂点から蹴落とす道です。

誰かが迫って来てあなたを蹴落とすまで続きます(図1)。もう一つの選択肢は、隣の人と手をつないで、同じ地球の上に共存する道です(図2)。

このスライドは、私の孫、9才のイタマール・アブラムソン(Itamar Abramson)が2年前に作ったものです。

2年前、アメリカでの ICASSI で、私は社会的平等についてお話しました。その時、人が平等の問題を少し深く考え始める時に起きてくる疑問に取り組みました。それで私は、いくつかの答えを出しました。それらをここでは繰り返しません。以前から参加されている方もおられますので、でも、興味がある方はどなたでも私にEメールアドレスを教えてください。後でコピーをお送りします。

文献

1. Adler, Alfred(1979). Superiority and Social Interest: A Collection of Later Writings. Edited by Ansbacher, Heinz L. & Ansbacher, Rowena R. W.W.Norton and Company Inc.: New York.
2. Rousseau, Jean Jacques (1712-1778). On the Inequality among Mankind. The Harvard Classics. <http://www.bartleby.com/34/3/1002.html>

更新履歴

2018年12月10日 アドレリアン掲載号より転載